

平成29年度企画展

## こんな人がいた 開拓使時代の北海道を生きた人びと

展示内容

主催：北海道立文書館

会期：2017（平成29）年7月25日～8月24日

会場：北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）

1階5号会議室

### ごあいさつ

本日は当館企画展「開拓使時代の北海道を生きた人びと」にご来場いただき、ありがとうございます。

本企画展では、開拓使が存在した時代に北海道で活動した人びとを、開拓使文書を中心とする資料で紹介しています。

今回紹介するのは、これまでの研究である程度その足跡をたどることができ、開拓使文書中に関連資料がある人物です。

それぞれの人物は、官吏や商業者の典型としての例ではなく、あくまでも個人として、150年近く前の北海道にどんな人がいて、どんなことしていたのかを紹介するように努めました。

当館では、今後も開拓使文書を始めとする貴重な歴史資料を大切に保存し、利用に供してまいりますので、皆さまにはより一層当館をご支援くださるとともに、ぜひご活用くださいますようお願いいたします。

開拓使は1869（明治2）年に設置され北海道・千島・樺太の開発と行政を担当した国の役所で、1982年に廃止されました（ただし樺太は1875年に担当区域から外れています）。

その開拓使の文書を当館では7,832点所蔵しており、それらは国の重要文化財に指定されています。

### 今井藤七

今井藤七は、「まるいさん」の愛称で親しまれる丸井今井百貨店の創業者です。新潟県出身の藤七は、函館を経て1872（明治5）年、24才の時、札幌で小間物店をスタートさせます。全商品の「正 札幌販売」（1879=明治12）や女店員の大量採用（1917=大正6）で有名になり、商売を拡大していきました。



1849（嘉永2） 新潟県三条市で米穀商今井七平の3男として生まれる

1871（明治4） 函館に渡り、商家につとめる

- 1872 (明治5) 札幌に移り、小間物商を開業
- 1874 (明治7) 南1条西1丁目南西角に  
店舗を新築。「丸井今井呉服店」ののれんをあげる。このとき26才
- 1925 (大正14) 没 77才

1.〔肖像写真〕 『札幌之人』より

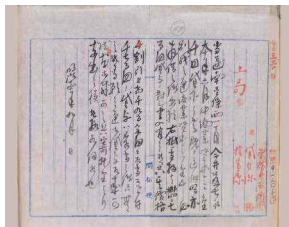
2.商業資本拝借願 1881(明治14)年 当館所蔵 簿書4653『取裁録』

「札幌区南1条西1丁目 拝借人 今井藤七」とあり、現在の「丸井今井」付近で商売を始めたことがわかります。

3.今井藤七支店 高崎龍太郎『札幌繁栄図録 全』(明治20刊) 所載

4.札幌区実業家案内双六 1903(明治36)年 北海道博物館所蔵

「上り」の手前に「丸井呉服店」「丸井洋物店」が見えます。



## 岩井信六

東京で製靴技術<sup>せいかにく</sup>を身につけた岩井信六<sup>しんろく</sup>は、西洋式の生活を基本とする札幌農学校の製靴師として雇われ、札幌にやってきます。2年後に独立して靴製造所<sup>くつ</sup>を構え、これは後の「岩井靴店」へと継承されていきました。



- 1860 (万延1) 新潟県長岡市に生まれる
- 1872 (明治5) 上京。オランダ人から製靴術を習う。
- 1876 (明治9) 札幌農学校の製靴師として雇われる
- 1878 (明治11) 靴製造所を構え、独立
- 1897 (明治30) 没 37才

5.〔肖像写真〕 『北海道大百科事典』より

6.対雁移民拝借之義二付願書 1878(明治11)年 当館所蔵 簿書2459『対雁移民書類』

明治11年、岩井信六が独立して製靴業を開業する際、製靴修行中の対雁移民アイヌを雇入れました。「檜山通」は現在の南3条西の辺りです。

7.靴製造所 岩井信六 高崎龍太郎『札幌繁栄図録 全』(明治20刊) 所載



## 北垣国道

北垣国道は、幕末期の志士から明治維新後に地方官を経て政府高官となるという、この時期によく見られたコースを歩んだ一人です。北海道との関わりは、弾正台大巡察としての北海道・樺太巡察（1870＝明治3）、開拓使官吏（約3年半）、北海道庁長官（4年弱）、退官後の函樽鉄道（のち北海道鉄道株式会社）社長就任などが挙げられます。



- 1836（天保7） 兵庫県養父市に生まれる
- 1863（文久3） 生野の変（尊王攘夷派による挙兵事件）を平野國臣らと起こし、失敗。⇒潜伏の後、鳥取藩に仕官
- 1868（明治1） 新政府側として戊辰戦争に参戦
- 1871（明治4） 開拓使に入る（物産取調掛、新冠に牧場を選定⇒浦河支庁）⇒1874依願退職
- 1875（明治8） 元老院少書記官、高知県県令、徳島県県令（兼任）を歴任
- 1881（明治14） 京都府知事に就任
- 1892（明治25） 北海道庁長官に就任
- 1899（明治32） 貴族院議員
- 1900（明治33） 函樽鉄道（のちの北海道鉄道株式会社）社長
- 1916（大正5） 京都で没 81才

8.〔肖像写真〕 北海道大学附属図書館編『明治・大正期の北海道（写真編）』から転載

9.浦河支庁下開拓事業見込の建議 1874(明治7)年 当館所蔵 簿書6023『開拓使公文録』  
北垣国道が浦河支庁主任の時に提出したもの。第1議は、浦河港新築、移農開拓方法、物産交易会所設置、道路新築、学校病院設置、土人化育方法、渡船設置の7項目からなります。第1議不採用なら第2議（牧畜の導入）を、それも不採用なら第3議（支庁を廃して費用を節減し開拓義社を設けること）を主張しています。

10.北海道開拓意見具申書 1893(明治26)年 北海道庁編『新撰北海道史』第6巻資料2所収

北垣国道が、井上馨内務大臣に提出したもので、「北垣12年計画案」とも呼ばれています。

地形測量、殖民地選定測量、鉄道、港湾、電信灯台、道路橋梁、駅逓、排水運河、土地配賦市街地区画、町村組織、衛生、実業教育、勸業、森林植樹の14項目からなります。

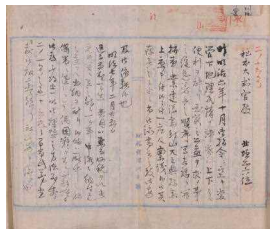
中でも鉄道、港湾、排水運河は具体的な区間・地点を挙げ費用の概算を記すなど、重視していたことがわかります。

この計画は日清戦争爆发によりごく一部しか実行に移されませんでした。後の北海道10年計画の先駆けになりました。

### 参考.琵琶湖疏水

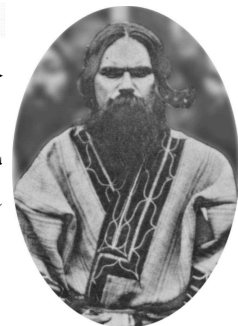
琵琶湖疏水とは琵琶湖の水を京都に引く水路で、北垣国道の事績の一つとして有名です。1885（明治18）年に着工、トンネルなどの難工事をクリアし、1890（明治23）年に第1期の完成を見ました。

上水だけでなく、物資輸送、水力発電などに使用されて京都の発展に貢献し、いまなお機能しています。観光客に人気の南禅寺通水閣、哲学の道なども琵琶湖疏水のたまものです。



### 琴似又市

アイヌの普通の家に生まれたマタイチは、少年期に石狩詰幕府役人の下で働いて和語や和風所作を身につけたようです。それにより、開拓使とアイヌ社会を仲介する形で存在感を増し、琴似アイヌの乙名（=長）となって琴似又市と名乗る（呼ばれる）ようになりました。しかし、アイヌを敢えて区別しない政策が進められるにつれ、仲介の役割は低下していきました。



- |           |   |
|-----------|---|
| 1842頃     | 下カハタ（現浦臼町）で生まれる？  |
| 1857頃     | 石狩詰幕府役人の下で働く  |
| 1868頃     | 琴似（今の清華亭あたり）に移る   |
| 1870（明治3） | 皇城拝見を希望し、開拓使官吏に同行し上京                                      |
| 1872（明治5） | 開拓使が後志・石狩のアイヌを上京、開拓使仮学校に入学させた時、その頭へ選ばれる。（～1874=明治7）       |
| 1878頃     | 篠路村・ <sup>しのろ</sup> 茨戸 <sup>ばらと</sup> に移転（勸業課試験場設置に伴うためか） |
| 1894以降    | <sup>たかす</sup> 鷹栖村 <sup>ちかぶみ</sup> 近文原野の旧土人給与予定地へ移転       |

11.〔肖像写真〕 北海道大学附属図書館所蔵 P(a)149 「開拓使東京第3号官園留学アイヌ人 其1」より

12.口取書（聞き取り書） 1874(明治7)年 当館所蔵 簿書953『雑書』

琴似又市は、東京で農業西洋器械取扱、器械を用いた煙草切、牛乳絞り方などを修行したので、今後は煙草切で生計を立てたいと望んでいる、と書かれています。

この後開拓使は、煙草切はこれまで営業してきた者でも苦しむほどの不景気なので難しいとして又市を思いとどまらせ、物産局で農夫として雇用しました。

13. 買い上げか替え地か 1877(明治10)年 当館所蔵 A4/25『諸課文移録』 札幌偕楽園近地琴似又市私有地へ遊園及び植物試験場開設ノ件

開拓使は本庁敷地の北西部に、遊園及び植物試験場を造ることにしました。その範囲に琴似又市の私有地（現在の清華亭あたり）が入っていました。

資料は、又市が土地の買い上げか、相応の土地との交換かのいずれを望むか確認してほしいと、開拓使から札幌区務所に依頼した文書です。

14. 林木払下願 1882(明治15)年 当館所蔵 簿書5204『山林取裁録』

琴似又市が船木7本の払下げを願い出て、許可された文書です。

これにより又市がこの時期、札幌区篠路村番外地（今の茨戸あたり）に住んでいたことがわかります。

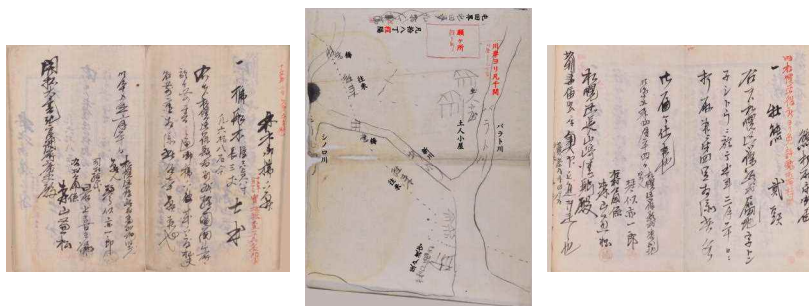
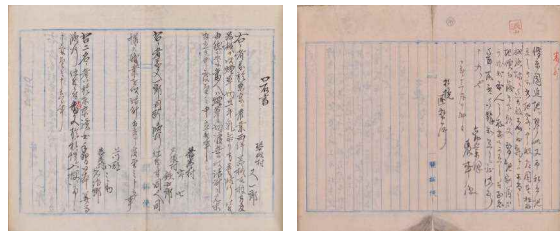
なお、伐採作業従事者は、アイヌの仲間の名が書かれています。

15. 熊打取二付御届 1882(明治15) 当館所蔵 簿書7357『札幌県公文録』

琴似又市が熊を打ち取り、証拠となる四足を添えて届け出た書類。

住所は同じく札幌区篠路村番外地となっています。

16. もっと知りたい 《東京・イチャルパ》への道—明治初期における開拓使のアイヌ教育をめぐる—（東京アイヌ史研究会編、2007年） 表紙写真

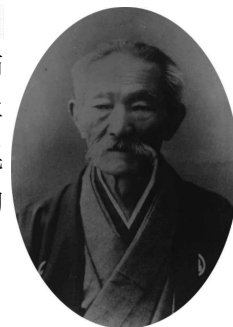




## 田本研造

たもとけんぞう

田本研造は長崎で写真術に触れ、箱館（函館）のロシア領事館医師のもとで写真術を磨き、1869（明治2）年に北海道で初めてとなる写真館を開きます。1871（明治4）年には開拓使の依頼で、小樽・札幌などの開拓状況を出張撮影しています。武林盛一をはじめ、明治初期の写真師を指導し、多くの記録写真を現在に残しました。



- 1832（天保3） 三重県熊野市くまのに出生
- 1855（安政2） 長崎へ出て、蘭医らんいの下僕となる
- 1859（安政6） 箱館に渡り、ロシア病院で助手となる。この頃、写真を始める。
- 1867（慶応3） 福山城を撮影
- 1869（明治2） 函館に北海道で初めての写真館を開業
- 1871（明治4） 開拓使の依頼で小樽・札幌などの開拓状況を出張撮影
- 1912（大正1） 没 81才

17.〔肖像写真〕 函館市中央図書館所蔵 g1000509「函館之写真師田本研造翁とその写場」より

18.札幌近郊写真差回通知 1872(明治5)年 当館所蔵 簿書5728『開拓使公文録原稿』  
開拓使の依頼で撮影した札幌、小樽の写真の目録が添えられています。音無榕山は田本の別号。

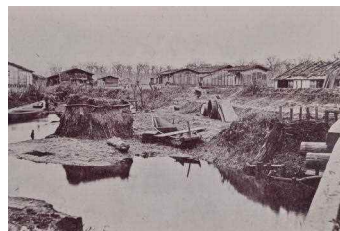
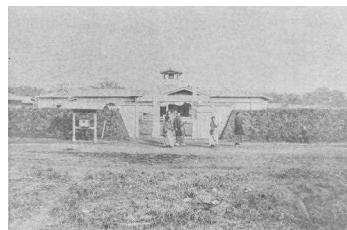
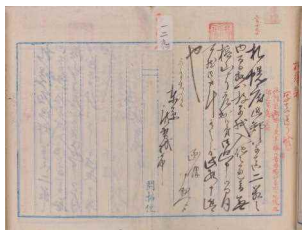
《田本研造が撮影した写真》

19.札幌旧本陣及び創成橋 1871(明治4)年 当館所蔵 P-1/117

20.開拓使仮庁舎と官員たち 1871(明治4)年 当館所蔵 P-1/119

21.札幌仮役所物見ヨリ西ヲ見ル 1872(明治5)年 当館所蔵 P-1/384

22.札幌篠路村ノ景 1871(明治4)年 当館所蔵 P-1/138



## 武林盛一

箱館奉行足輕であった武林盛一は、幕末の箱館（函館）で写真術を身につけました。箱館の写真師田本研造や横浜の欧人写真師スチルフリートらの指導を受け、出稼ぎ先の札幌で開拓使の御用写真師となりました。その後、札幌に写真館を開業し、明治初期の各地の建物などを多く記録に残しました。



- 1842（天保13）青森県弘前市ひろさきに出生
- 1859（安政6）箱館に渡り、箱館奉行足輕となる。入港する外国艦に出入りし、写真術に目覚める。
- 1871（明治4）函館で写真営業を始める
- 1872（明治5）出稼ぎ撮影に赴いた札幌おもむに居を構え、御用写真師となる
  
- 1876（明治9）写真館を新築
- 1884（明治17）東京麹町こうじまちに進出して写真営業を始める
- 1908（明治41）没 66才

### 23.〔肖像写真〕 『武林写真館五十年誌』より

24.写真師になりたき旨願書 1870(明治3)年 当館所蔵 簿書158 『在官非官開墾婦工商・府藩県士族人別入・当地引払願届留』

武林亀蔵（盛一の別称）から開拓使へ提出されました。

《武林盛一が撮影した写真》

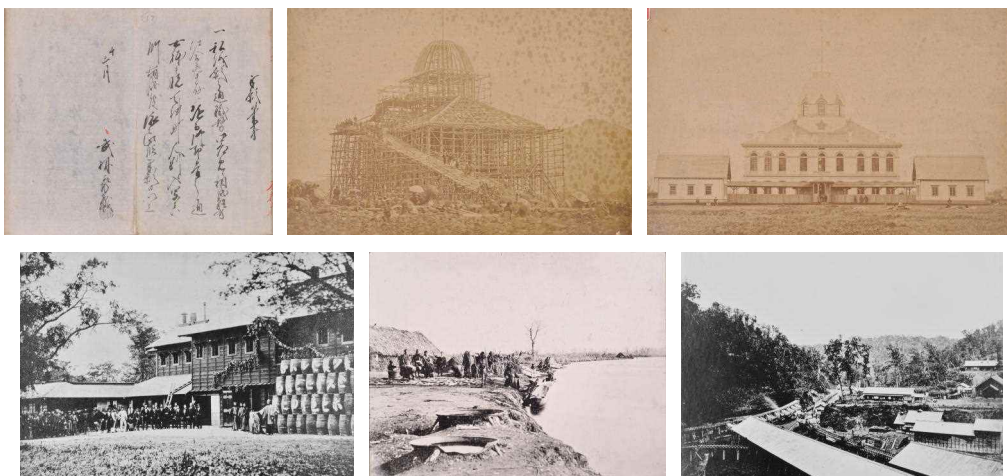
25.開拓使札幌本庁舎 1873(明治6)年 当館所蔵 P-1/120, 121

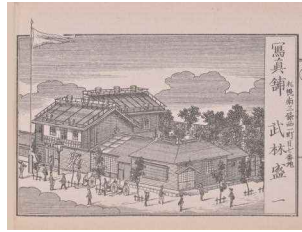
26.札幌麦酒醸造所開業式 1876(明治9)年 当館所蔵 P-1/656

27.石狩川字シビシビウス鮭漁業の景 1877(明治10)年頃 北海道大学附属図書館所蔵 Aa 141

28.幌内山上ヨリ第六隧道ヲ望ムノ図 1877(明治10)年代末 当館所蔵 P-1/654

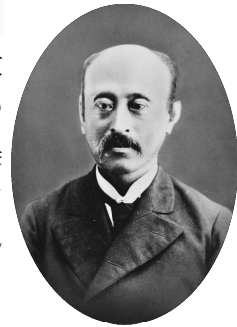
29.写真舗 武林盛一 高崎龍太郎『札幌繁栄図録 全』（明治20刊）所載





## 伊達邦成

仙台藩の一門・亙理伊達家当主であった伊達邦成は、戊辰戦争に敗れて領地を失ったため、明治新政府の北地開発に協力し北海道への移住に踏み切りました。有珠郡の土地を与えられた邦成は、西洋農機具を取り入れるなどして、家老の田村顕允とともに先頭に立って開拓を進めました。「伊達」という地名は邦成らによる開拓にちなんで付けられたものです。



- 1841 (天保12) 仙台藩一門岩出山領主伊達義監の次男として生まれる
- 1859 (安政6) 亙理領主伊達邦実の養子となる
- 1869 (明治2) 有珠郡の支配を許され、実地調査のため北海道に渡る
- 1871 (明治4) 永住を決意して、旧家臣らとともに有珠郡に入る
- 1904 (明治37) 没 63才

- 30.〔肖像写真〕 北海道大学附属図書館編『明治・大正期の北海道 (写真編)』から転載
- 31.北海道胆振国有珠郡洋農器械馬具新製双連組馬之略図 1875(明治8)年 当館所蔵 簿書5604『開拓使公文録』
- 32.伊達邦成旧家来開墾地概図 1874(明治7)年 当館所蔵 簿書6400『略輯旧開拓使会計書類』  
明治7年頃の今礼稀府村・紋鼈村・小砂流別村開墾地の街割の様子が描かれています。
- 33.器械取扱指南之者出張奉願候書 1874(明治7)年 当館所蔵 簿書5977『開拓使公文録』  
明治7年に伊達邦成・田村顕允から西洋農法器械の取扱指南の願書が提出されました。
- 34.伊達邦成邸宅 高崎龍太郎『北海立志図録 全』(明治23刊) 所載

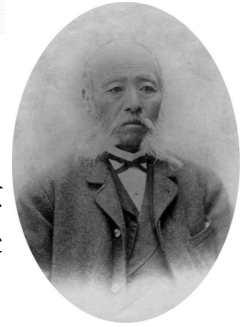






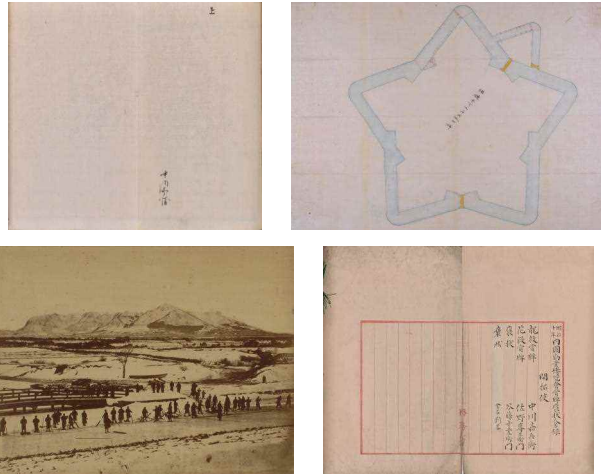
## 中川嘉兵衛

中川嘉兵衛は幕末期に横浜で外国人と接したことで氷の効用を知り、製氷を試みました。各地での製氷に失敗を重ねた後、北海道へ渡り、ブラキストンの助言を得て五稜郭の外壕で製氷に着手し、ようやく良質の氷を得ることに成功しました。これは「函館氷」として東京・横浜方面へ出荷され、好評を博しました。嘉兵衛の氷会社は、後のニチレイへと繋がっていきました。



- 1817 (文化14) 愛知県岡崎市の豪農の長男として出生
- 1859 (安政6) 横浜で英国公使館のコック見習いとなり、後に牛乳店を開業。この頃、米国人へボンらから氷の必要性を教わる。
- 1861 (文久1) 富士山麓ほか各地で製氷を試み、失敗 (~1866=慶応2)
- 1867 (慶応3) 箱館に移り、七重浜で製氷を試みるが失敗
- 1869 (明治2) 五稜郭の外壕で製氷に着手。翌年から京浜地方に送り込み、氷質の良さで有名になる。
- 1890 (明治23) 製氷場を神山村 (函館市) に移す
- 1897 (明治30) 没 81才

- 35.〔肖像写真〕 函館市中央図書館所蔵 ph001016
- 36.氷税、氷室代上納方法についての願書 1873(明治6)年 当館所蔵 簿書767『東京往復』  
氷専売が許可になったのに伴い提出された願書
- 37.五稜郭外壕伐氷の図 1882(明治15)年 当館所蔵 簿書7688『院省文移録』  
伐氷のため陸軍省所轄の五稜郭外壕拝借願に添えられた図面
- 38.五稜郭での伐氷 1877(明治10)年 函館市中央図書館所蔵 g1000211「五稜郭伐氷図」  
函館の写真師田本研造の撮影
- 39.第1回内国勸業博覧会賞牌 1877(明治10)年 当館所蔵 簿書2389『明治十年及第二回内国勸業博覧会賞状賞牌授与目録』  
中川嘉兵衛出品の氷は龍紋賞を受けました。
- 40.函館氷の広告 函館市中央図書館所蔵 be001111-0001「函館氷広告」



## 永山武四郎

永山武四郎は時任ときとう為基ためもとらと「屯田兵」の設置を建議しました。武四郎は、陸軍と開拓使の両方に属し、屯田兵創設以来関わりを持ち続け、「屯田兵育ての親」と言われています。北海道庁の時期に屯田兵司令官になると、屯田兵の役割を警備主体から開拓主体へと切りかえたため、屯田兵は北海道開発の大きな原動力となりました。



- 1837 (天保8) 薩摩藩士の4男に生れ、永山喜八郎の養子となる
- 1868 (明治1) 戊辰戦争に参加
- 1871 (明治4) 陸軍大尉
- 1872 (明治5) 開拓使8等出仕
- 1873 (明治6) 屯田兵設置を建議
- 1885 (明治18) 大量募兵・屯田制拡充について建議。屯田兵本部長
- 1887 (明治20) 露・米・清3国に出張、移民兵制，コサック兵の駐屯状況，寒地農業など視察
- 1888 (明治21) 北海道庁長官兼任（～1891=明治24）
- 1889 (明治22) 屯田兵司令官
- 1896 (明治29) 札幌に第7師団創設、師団長。陸軍中将
- 1900 (明治33) 休職
- 1904 (明治37) 没 68才

41.〔肖像写真〕 北海道大学附属図書館所蔵 S(b)122

42.永山武四郎らによる屯田兵設置の建言 1873(明治6)年 国立公文書館所蔵 建00016100『上書建白書・諸建白書・明治六年四月～明治六年十二月』〔開拓次官黒田清隆ニ命シ兵務ヲ兼管セシメ当使貫属ノ中ヨリ兵卒ヲ徴募シ隊伍ヲ編制シ便宜処分ヲ得セシメン事ニツキ建言〕

ロシアを念頭に置いた国境警備や、反乱の鎮圧ができるよう、自ら開墾・農業を行う兵を整備し、開拓次官・黒田清隆に兵事を兼務させることを提起しています。

43.准陸軍中佐永山武四郎外三名、<sup>ロシア</sup>魯国<sup>コルサコフ</sup>哥爾薩港へ派遣ノ件 1879(明治12)年 当館所蔵  
簿書10766『稟裁録』

屯田兵の参考とするため、コルサコフの状況を永山武四郎に視察させたいとする、開拓長官黒田清隆から太政大臣三條実美宛ての伺。

伺は聞き届けられ、その旨が同じ紙に朱書されています。

44.准陸軍中佐永山武四郎、<sup>ロシア</sup>魯国<sup>コルサコフ</sup>哥爾薩港へ出張ノ件 1879(明治12)年 当館所蔵  
簿書5902『開拓使公文録』

コルサコフ出張の出発日程の上申と、帰着した旨の報告。報告には、出張紀行、塩漬鯨製法、同地の責任者・サーボ中佐より黒田清隆への書が含まれています。



仁木竹吉

徳島藩の家老で藍製造を業としていた仁木家の出身である竹吉は、吉野川の水害に苦しむ流域の農民を救うため、北海道に新天地を求めました。1875(明治8)年から道内各地を視察し、旧主稲田家の移住地である静内<sup>しずない</sup>で藍栽培につとめた後、1879(明治12)年に郷里の農民とともに余市郡内<sup>よいち</sup>に移住しました。これは民間有志による初の開拓団体で、現在の仁木町<sup>にき</sup>の基礎となりました。



- 1834(天保5) 徳島県川島町に出生
- 1875(明治8) 北海道で藍とたばこを栽培するため移住を志す。東京の黒田長官を訪問、北海道を実地調査。
- 1879(明治12) 余市郡内に移住地を選定。同志を募り117戸368人とともに余市郡内に移住。
- 1881(明治14) 村名、仁木村となる
- 1882(明治15) 瀬棚郡に徳島県より80戸を入植させる
- 1915(大正4) 没 81才

45.〔肖像写真〕 『新仁木町史』より

46.村名新設伺及び布達 1880(明治13)年 当館所蔵 簿書5910『開拓使公文録』・簿書

10768 『申奏録』

仁木竹吉らの移住地には「仁木村」と村名がつけられました。

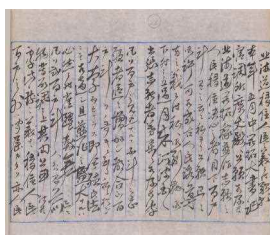
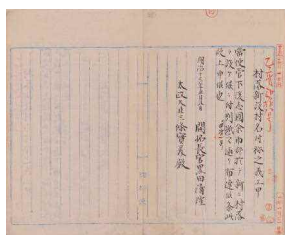
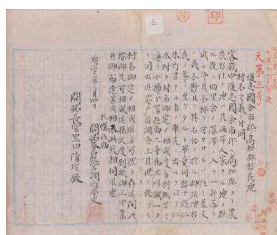
47.北海道移住人民之義二付歎願、余市郡略図 1879(明治12)年 当館所蔵 簿書3716 『小樽郡余市移民一件』

仁木竹吉による移住歎願書と移住予定地の図面

48.余市仁木村藍畑 1896(明治29)年 北海道大学附属図書館 D(b)85

入植から10数年後にはこのような藍畑が広がっていました。

49.余市仁木村 明治末頃 北海道大学附属図書館 D(b)87



## ブラキストン

英国の軍人で探検家、さらに鳥類研究者でもあったブラキストンは、津軽海峡が動物の分布境界線であるとする「ブラキストン・ライン」で有名ですが、幕末から明治にかけての函館（箱館）では実業家としても活躍しました。気象観測や測量、博物学、英語などを日本人に教え、開拓使官吏となる富士成豊ふくしなりとよなどに大きな影響を与えました。



1832 (天保3) イギリスで出生

1861 (文久1) 箱館に上陸、2ヶ月後帰国

1863 (文久3) 西太平洋商会の責任者として箱館に来住

1864 (元治1) 日本で初の蒸気力による製材業を始める

1867 (慶応3) 箱館に英国人ジェームス・マルと共同でブラキストン・マール商会を設立。製材業や清国・国内貿易しんを始める。

1883 (明治16) アメリカに渡る

1891 (明治24) アメリカにて没 59才

50.〔肖像写真〕 函館市中央図書館所蔵 ph001169-0001

51.鳥類剥製寄贈文書 1879(明治12)年 当館所蔵 簿書番外18-52 『Letters from all



foreign marchants of 1879』

ブラキストンが福士成豊とともに収集した鳥類剥製を開拓使に寄贈することを申し出た文書

52.ブラキストン商会証券 1872(明治5)年頃 函館市中央図書館所蔵 522 画像提供：北海道大学附属図書館 道史(4)-74

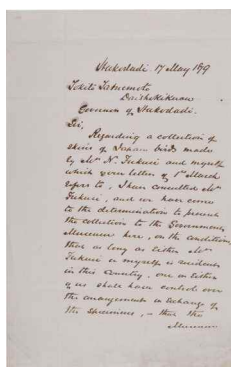
ブラキストンが発行しようとしていた証券(原寸5.6×9cm)

53.ブラキストン標本 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館提供(加藤克氏撮影)

開拓使に寄贈された鳥類標本。現在は北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園内の博物館に保管されています。

54.ブラキストンによる気象観測 1868~1872(明治1~5)年 当館所蔵 簿書7184『開拓使事業報告原稿』

明治元年から5年まで函館の自宅において気象観測を行っていました。



## 福士成豊

ふくしなりとよ

福士成豊は箱館(函館)のイギリス人ポーター経営の商店で英語を身につけ、ブラキストンとの交友で測量、測候、博物学などを学びました。開拓使の官吏となった成豊は「英和対訳辞書」の編さんに携わり、アメリカ人技師の指導の下、三角測量を行い、さらにロシアや千島列島の調査や測量に従事し、多くの地図や報告書をまとめました。



- 1838 (天保9) 箱館に船大工<sup>つづきとよじ</sup> 続 豊治の5男として出生  
 1842 (天保13) 回船業福士長<sup>ちようまつ</sup> 松の養子となる  
 1851 (嘉永4) 実父豊治から造船を学ぶ  
 1862 (文久2) イギリス人ポーター商会の店員となる  
 1868 (明治1) 箱館府外国方運上所出役通弁  
 1869 (明治2) 開拓使官吏となる⇒札幌県、北海道庁に勤務  
 1891 (明治24) 北海道庁を退職  
 1922 (大正11) 没 83才

55.〔肖像写真〕 函館市中央図書館所蔵 ph001071-0001

56.英人ブラキストンに付添巡回申付辞令 1870(明治3)年 当館所蔵 簿書147『御書附留』

57.東察加紀事略 当館所蔵 旧記932

明治8年のカムチャッカ地方の調査結果を福士成豊がまとめたもの。

58.英和对訳辞書 北海道立図書館所蔵

明治5年7月、開拓使が出版。福士もこの辞書の編集に参加しました。

59.気候測量略表 1874(明治7)年 当館所蔵 簿書5794『公文録』

明治5年にブラキストンの気候観測を引継ぎ、福士は開拓使函館支庁、札幌本庁において気候観測に携わりました。観測結果は『気候測量略表』にまとめ、各所へ配布していました。

60.地誌測量必需品買上願 1873(明治6)年 当館所蔵 簿書789『評議留』

測量取調に必要な道具をブラキストン・マール社を通して購入していました。

61.千島列島の測量をもとに作成された港湾図 1876(明治9)年 当館所蔵 Ma-1/25『北海道千島州振別郡西海岸振別湾図』, Ma-1/26『北海道千島州得撫郡得撫島東海辺小船港図』



## 細川碧

細川碧<sup>みどり</sup>は、明治維新後の分領支配期<sup>いちのせき</sup>に一関藩<sup>いっせき</sup>の現地メンバーとして白老郡<sup>しらおい</sup>に赴任し、分領支配終了後に開拓使の官吏<sup>かんり</sup>となりました。その後も札幌県、農商務省北海道事業管理局、北海道庁などの行政官を務め、退官後は札幌商業会議所の書記長となるなど、北海道のために働きました。北海道温故写真帖、北海道小史を出版するなど、歴史を記録に残すことにも尽力しました。



- 1848（嘉永1） 一関藩士の長男として生まれる
- 1869（明治2） 一関藩の拓殖事務担当として白老郡に詰める
- 1872（明治5） 開拓使に出仕
- 1893（明治26） 退官
- 1907（明治40） 札幌商業会議所書記長
- 1913（大正2） 北海道温故写真帖・北海道小史を出版

62.〔肖像写真〕 北海道大学附属図書館所蔵 写真帖128-337『北海道温故写真帖』より

63.アイヌの「仕掛弓」禁止に関する照会への回答 1875(明治8)年 当館所蔵 簿書6098『開拓使公文録』従来土人使用ノアマツポ、使用禁止ノ件

張った紐<sup>ひも</sup>に動物が触れると毒矢が発射されるアイヌの「仕掛弓」。開拓使は、人が誤って射られたら危険という理由で、禁止を前提に各地の現状を報告するよう求めました。

資料は室蘭出張所の報告です。

管内は海漁が主で、山猟の仕掛弓は使われていないが、一般論として、禁止してしまうとアイヌの生計維持に支障があるので、仕掛けた場所を明確にするなどの手段を講じて禁止を回避してはどうか、と意見をつけています。

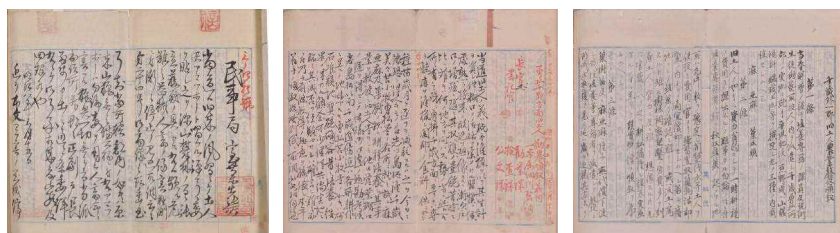
この意見が細川碧から出たものかどうかはわかりませんが、碧は室蘭出張所の主任だったので、その意に反するものではないと推測できます。

64.千歳外一郡旧土人農業教授順叙 1879(明治12)年 当館所蔵 簿書3051『長官滞札中書類』

細川碧が起案した文書で、従来千歳・勇払のアイヌは鮭・鹿を食料にしてきたが、戸口の増加により資源の減少が予想されるので、麻・亜麻・果樹の栽培を行わせ生計を立てさせる、とする内容です。

黒田長官が裁可し決定になりましたが、その後、費用がかかりすぎるためか、実行に移されなかったようです。

瘦地<sup>やせ</sup>でうまくいかない場合は、官費<sup>こううんはしゆ</sup>で耕耘播種し、利益が出たら投じた費用を弁償させるなどとも書かれています。ある程度の配慮をしているようにも思われますが、その間の生活が成り立つのか疑問も残ります。



## 本多新

本多新<sup>あらた</sup>は、若い頃に無断で家を出、江戸で安井息軒<sup>やすいそくけん</sup>に学びました。明治維新後、開拓使に採用されますが短期間に終り、室蘭に移って旅館、風呂屋などを営みました。常盤<sup>ときわ</sup>学校を設立、鉄道敷設を請願するなど室蘭の発展に尽力する一方で、政府への意見書提出や自由民権運動も行いました。



- 1843 (天保14) 山形県に生まれる
- 1872 (明治5) 3. 29開拓使に採用され、札幌本道工事に携わる  
11. 26工事の区切りに伴う人員整理にあい室蘭へ
- 1876 (明治9) 常盤学校を創立
- 1880 (明治13) 元老院に「国会開設ノ儀」を建白、全国有志宛てに「国会開設ノ檄文」を発送
- 1881 (明治14) 自由党創立大会に参加
- 1888 (明治21) 鉄道敷設請願運動 (その後も数度にわたり行う)
- 1914 (大正3) 没 72才

65.〔肖像写真〕 札幌市中央図書館所蔵 114776776 「山形屋寄贈写真」より

66.憂国ノ建言 1874(明治7)年12月18日 国立公文書館所蔵 建00017100『上書建白書上書建白書・建白書・明治七年～明治十年』

国勢の強弱は天皇陛下が英雄かどうかにか左右されるので、陛下は北海道を始め各地を巡遊して広い知見を身につけてもらいたいとする、本多新の建言。

下のケースの資料に関する建言とは別のものですが、本人の筆致がわかるよう展示しました。

67.請書を差し上げ奉る／請取書／請書 1874(明治7)年 当館所蔵 簿書6023『開拓使公文録』

〔請書を差し上げ奉る〕政府に出した献白(建白)書が戻されてきた際に本多新が開拓使に提出した、「請書」を提出しますという趣旨の文書。

新の建白は、財産を持たない零細民を救うため官と豪民が資金を出して北海道に移住させるべし、という内容でしたが、試算がなされておらず現実味が無いという理由で返却となりました。

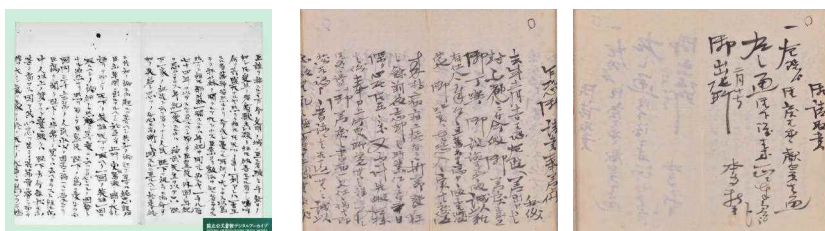
新は、激しやすい気質で前後を忘れて出してしまったもので、覚えていないが確かに自分の書いたものである、「不敬無礼の極」を申し上げる結果となったと「恐れ入」



っています。

〔請取書〕左院より返却された献白（建白）書1通を確かに受け取りました、という内容の、本多新が提出した書類です。

〔請書〕本多新は献白（建白）書の返却に際し、札幌本庁に呼び出され、今後は「自己の産業に一層竭力し、余暇に読書等実意勉励」するようにと説諭を受け、今後は官のお手数にならないようにしますという請書を提出しました。しかし上のパネルにあるように、新はこの後も建白書を提出しています。



### 松本十郎

松本十郎<sup>じゅうろう</sup>は戊辰戦争で賊軍<sup>ぼしん</sup>とされた庄内藩<sup>ぞくぐん</sup>の出身ですが、後の開拓長官<sup>くろだきよたか</sup>・黒田清隆<sup>すいせん</sup>の推薦で開拓使の官吏<sup>かんり</sup>となりました。岩村通俊<sup>みちとし</sup>が黒田と衝突して辞職すると十郎が札幌本庁の責任者となり、行財政の健全化や公共工事、農民の保護対策などを行いました。しかし、樺太千島交換条約により宗谷に移住させていた樺太アイヌを対雁<sup>からふと</sup>（江別市）に再移住させることに反対して黒田と衝突、帰省してそのまま辞職し隠退しました。



- 1839（天保10） 庄内藩士戸田文之助の長男として生まれる
- 1869（明治2） 開拓判官となる（根室在勤）
- 1873（明治6） 札幌本庁主任、大判官となる
- 1876（明治9） 辞職、庄内（山形）に戻る
- 1916（大正5） 没 78才

68.〔肖像写真〕 北海道大学附属図書館編『明治・大正期の北海道（写真編）』から転載

69.札幌を支庁とし東京を本庁と定むる等、松本大判官の伺 1875(明治8)年 当館所蔵 簿書5824『公文録 本庁伺』

松本十郎は、

- ①札幌が本庁とはいいながら東京に伺をたてなければ何事も決まらないので東京を本庁とすべきこと、
  - ②北海道開拓は大規模で長期間にわたる事業なので、臨時の組織を意味する「使」ではなく「省」にすべきこと、
- を主張しました。

それに対して東京出張所では「難聞届」（聞き届け難し＝却下）と判断しましたが、その理由を付紙に書いて伺書に貼り付けています。

## 参考.松本十郎文書の紹介

北海道立文書館では、松本家（山形市）所蔵資料をマイクロ化複製し、利用に供しています。

1869（明治2）年8月の開拓判官任官当初からの公務日記、13点からなるもので、札幌本庁主任となった1873（明治6）年末までの記述があります。

なお、北海道史編集資料（文書等の部）中に、「空語集」（十郎が帰郷後に記録を整理しまとめたもの）などを含む松本十郎関係文書があり、こちらも閲覧可能です。

